

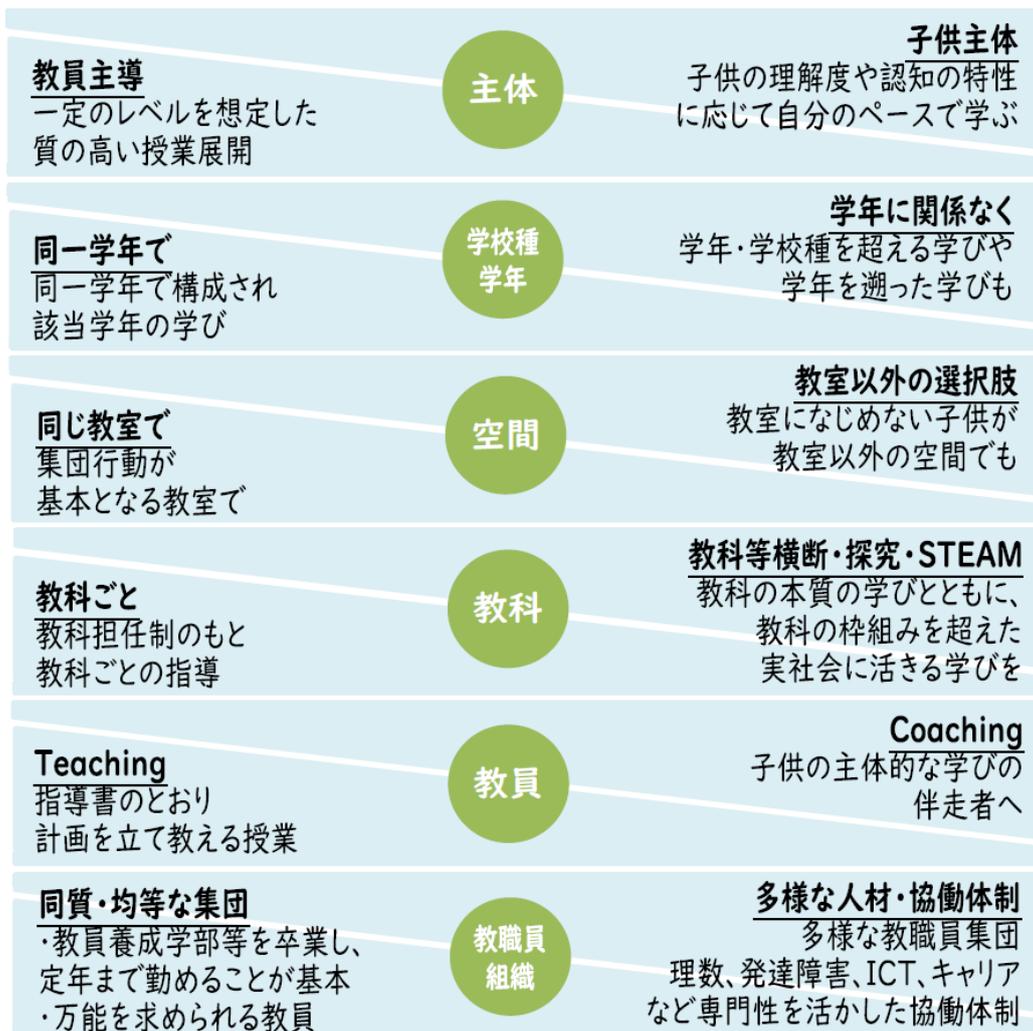
Ⅲ 「学習者主体の授業」による学びの質の向上

Ⅰ 「学習者主体の授業」を実現するにはどのような考えが必要ですか

Answer

子供に委ねる場面と教員が主導する場面とのバランスを踏まえた単元計画をデザインした上で、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を図り、「主体的・対話的で深い学び」を実現することが大切です。

- 「学習者主体の授業」は、多様な特性を有する全ての子供に対して、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させることを通して、「主体的・対話的で深い学び」を実現し、これからの社会で求められる資質・能力を育成することを目指します。
- 「個別最適な学び」と「協働的な学び」が一体的に行われる授業では、子供が主体となって興味・関心に応じて学習方法や内容を選択・決定していく場面も必要となります。
- ただし、全ての授業を子供に委ねなければならないということではありません。教員による質の高い授業が子供の資質・能力の育成につながる場合もあります。
- 下の図は、Society 5.0の時代に求められる人材育成の観点から、教育の在り方を整理したものです。学びの主体や教員の役割など、教育の在り方が示されています。
- つまり、これからの教員に求められることは、教科等の特性や子供の実態に応じて「教員主導」と「子供主体」のバランスを見極めて単元計画をデザインしていくことであり、教材研究を重ねることが重要になります。



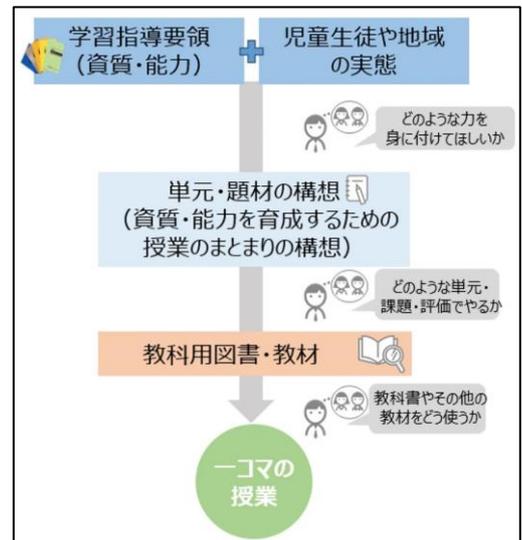
(出典)「[Society 5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ\(内閣府 総合科学技術・イノベーション会議資料【令和4年6月2日】\)](#)」を基に作成

2 「学習者主体の授業」はどのようにデザインすればよいですか

Answer

単元を通して育成したい資質・能力を明確にし、それを全ての子供が身に付けられるようにするために、子供の実態や教科等の特性を踏まえながら全体に指導する場面、子供が個別に学習を進める場面、協働的に学習を進める場面を効果的に組み合わせて単元計画をデザインすることが大切です。

- 「学習者主体の授業」を実現するためには、教員には単元全体を見通して学びを構想する役割が求められます。単元という一定のまとまりの中で、学習のねらいやゴールを明確にし、子供が主体となって学ぶ場面と教員が指導する場面を意図的に配置することが大切です。
- 具体的には、求められる資質・能力や子供・地域の実態に応じて、単元をどのように構成するかが重要です。例えば、学習の見通しを立てたり、学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚できる場面や、対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面をどこに設定するか、子供が個々にじっくりと取り組んだり考えたりする場面と教員が教える場面をどのように設定するかといった観点で、単元計画をデザインすることが「学習者主体の授業」の実現につながります。



(出典)

文部科学省「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」のためのサポートマガジン『みるみる』

3 「学習者主体の授業」は、具体的にどのように進めればよいですか

Answer

育成する資質・能力を踏まえた上で子供に学習を委ねる場面や、子供自身が自己選択・自己決定できる機会を意図的に設定しながら進めていくことが大切です。その際、教員は「ファシリテーター的な役割」として、子供たちそれぞれの学びを見取り、指導に生かすことを重視して関わることが求められます。

- 県教育委員会では、「学習者主体の授業」を、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の視点をもった「主体的・対話的で深い学び」が実現する授業と捉えています。以下のような一律・一斉・一方向の授業だけで、「学習者主体の授業」を実現することは可能でしょうか。

【「一律・一斉・一方向の授業」では…】

～子供の授業中の様子～

- 子供が個々に教師に向かって話す。
- 子供がただ板書を写している。
- 教員の指示を待っている。
- 挙手をする子供が決まっている。
- ノートへ積極的に書こうとしない。
- グループ学習ではいつも見ているだけの子供がいる。
- 対話に目的がなく、ただ話している。



～教員の姿勢～

- いつもしゃべっている。
- 子供の発言を解説する。
- 子供と一問一答が多い(黒板の前から離れない)。
- 板書を書くこと、写させることに徹している。
- 挙手をする子供(同じ子供)に指名をする。
- グループの代表の子供に順番に発表させる。



授業

- ・同じ内容を同じ方法で、同じペースで進める授業
- ・教師の指示通りに進められる授業

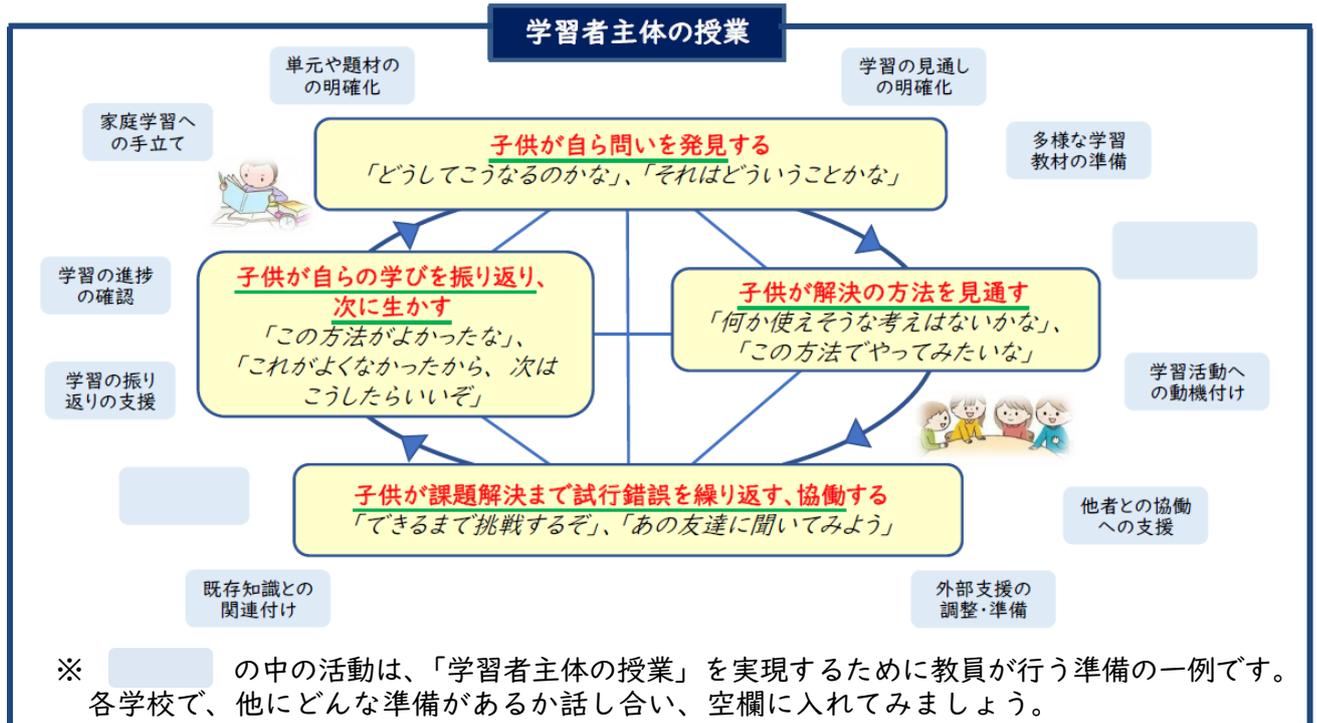
子供の姿

- ・受け身で教師の指示を常に待つ姿
- ・指示や内容に疑問を感じず行う姿

教員の姿

- ・「知識及び技能」といった「見えやすい学力」に重点をおいた指導をする姿
- ・子供が周りと同じように行動することを前提とした姿

- 子供の個性や特性が多様になっている今、これまでの一律・一斉・一方向の授業だけでは、「学習者主体の授業」を実現することは困難だと思われます。子供が自分の学習状況を把握し、自ら学びを進めていくことが必要です。
- つまり、「学習者主体の授業」では、子供が自ら「問いを発見する」、「解決の方法を見通す」、「課題解決まで試行錯誤を繰り返す、協働する」、「自らの学びを振り返り、次に生かす」といった活動に取り組むことで、各教科等の「見方・考え方」を働かせながら資質・能力を身に付けていくことができると考えます。
- ただし、子供が自ら学びを進めていくために、教員が単に選択の機会を設けるだけでは十分ではありません。単元のねらいや子供の実態を踏まえて学習過程を構想し、目的をもった自己選択・自己決定となるよう意図的に支援することが大切であり、誰一人取り残されることなく資質・能力を身に付けられる学びを支えていくためには、下の図に示すような様々な準備を講じることが求められます。



- 授業では、子供たちが何をつぶやいているのか、何を書いているのかという姿（事実）をしっかりと見取り、その姿を認める。その上で、困っている子供が求めたタイミングで必要な内容を提示します。
- このように、教員は子供の学びを支援する「ファシリテーター的な役割」を果たすことが大切であり、こうした関わりによって、子供たちは主体的に学習に取り組むようになると考えています。

有能なファシリテーターは例えば・・・

【前提として】子供は「有能な学び手である」と信じる。

① 準備万端!

- 子供たちにとって、課題解決したくなる問題や内容等を提示する。
- 本単元で育成する資質・能力を子供たちと共有する。
- 学びに関わる多くの決定を子供に委ねられるように、単元構成や内容を工夫・開発する。
- 試行錯誤できる場や時間を設定し、必要となる資料や教具などを準備する。

② しっかり伴走!

- 子供のつぶやきや反応から、何にこだわっているか、どこにつまずいているかをしっかりと見取り、認める。
- 子供に合わせて、立ち止まって一緒に考えたり、新たな視点を与えたりする。
- 振り返りを行わせ、子供の伸びや成長をしっかりと価値付け、称賛する。

- そして、教員には、子供が自ら選択し学びを進める姿が実現しているかを見取りながら、単元や一単位時間ごとに、不断のPDCAサイクルを回していくことが求められます。

【「学習者主体の授業」では…】

～子供の授業中の様子～

- 子供が自ら問いをもつ場面がある。
- 子供が問題解決に向けて見通しをもっている。
- 子供が黒板、教科書、ノート、ワークシート、タブレット端末等を自分で選択し、学びを進めている。
- ネット環境を活用し、様々な角度から情報を適切に集めて考えをまとめている。
- 子供が問題解決のときに、分からない友達に教えたり聞きに行ったりしている。
- 子供が授業内容によって個、ペア、グループで学ぶことを選択している。
- 子供が各教科等の「見方・考え方」を働かせる場面がある。
- タブレット端末のアプリなどを活用し、友達と意見を比較しながら考えている。
- 発表する相手を意識し、著作権などに配慮した発表データをつくっている。
- 子供全員が考えを出せるホワイトボード・短冊・付箋・タブレット端末等を使っている。
- 子供が友達の意見に関連付けて自分の意見を発表している。
- 子供が自分の言葉でまとめを書き、まとめた内容は課題と一体となっている。
- 子供が学んだ内容や、自分の学び方についてそれぞれ振り返りを行っている。

～教員の姿勢～

- ICTを活用して資料等を大きく見せている。
- 端末を持ち帰らせるなどして学びが連続する家庭学習の工夫をしている。
- ICTを活用し、友達と協働できる学習の工夫をしている。
- 子供が一人で考える時間と協働する時間のバランスを工夫している。
- 子供が、各教科における「見方・考え方」を働かせながら資質・能力を身に付けているかどうかを見取っている。



※ イラストは「Image Creator」（画像生成AI）において「ICTでグループ学習をいきいきと楽しそうに行う授業 教員は子供を見守る デジタル アート イラスト」と入力し、作成

授業

- 子供それぞれの興味・関心や学習進度に応じた授業
- 子供が解決の方法を自分なりに選択・判断する授業
- 子供が自分の学びを振り返り、次に生かしていこうとする授業

子供の姿

- 意図をもって、主体的に課題に取り組む姿
- 一人一人が自分の課題解決に向けて、試行錯誤を繰り返し、学びを調整する姿
- 協働してものや考えを創り出す姿

教員の姿

- 「思考力、判断力、表現力等」といった「見えにくい学力」や「学びに向かう力、人間性等」といった「見えない学力」も大切にする姿
- 子供たちを信じ、可能な限り学習を委ねる姿
- 一人一人のよさに着目し、そのよさを伸ばそうとする姿

(出典)「子供が自ら学びだす「教えない授業」を創る【令和5年4月10日】(ぎょうせい)」を基に作成

4 「学習者主体の授業」とつながる家庭学習はどのように進めればよいですか

Answer

子供が主体的に学び続けていけるように家庭と連携を図りながら、家庭学習の目標や内容、進め方等を自分で決めて目標達成を目指す「家庭学習マイゴールチャレンジ」を推進することが大切になります。

- 「学習者主体の授業」を実現し、子供がより効果的に資質・能力を身に付けていくためには、家庭学習においても、子供の主体的な取組が求められます。
- 家庭学習の基本的な進め方については、全校体制で共通理解するとともに、家庭や近隣の小・中学校と連携を図ることが効果的です。
- 学校が一律に指示する課題に取り組むのみではなく、子供が家庭学習の目標や内容、進め方等を自ら決めて取り組む割合を、学年や子供の実態に応じて、段階的に増やしていくことが大切です。

－学校の取組例－

- 授業において、学んだことを日常生活に結び付けて考える場面の充実を図る。
- 予習型授業を導入し、授業内で行っていた自己追究(自力解決)を家庭での学習として位置付けて取り組むようにする。
- 家庭学習で何に取り組めばよいか分からない児童生徒への個別の支援を充実させる。
- 帰りの会や授業の中で今日の家庭学習の計画を立てる時間を設定する。
- 「マイゴールチャレンジカード」等を作成し、児童生徒が自ら計画を立てて取り組み、その振り返りを行えるようにする。
- 児童生徒の取組に、称賛や助言など具体的なコメントを添える。 など

－「マイゴールチャレンジ」の例－

- 学校から指示された課題をやりとげたり、漢字練習や音読、計算練習を継続的に取り組んだりする。
- 授業で分からなかった問題を解いたり、さらに難しい問題に挑戦したりする。
- 教科書やノートを読み返して、授業で学んだことを「自分ノート」にまとめる。
- 教科書やノートを見ながら、次の授業で学習する内容を予習する。
- 教科で学習したことを生かして、発展的な学習に取り組む。
 - ・ 国語の時間に学習した教科書教材とテーマが同じ本を読み、感想をまとめる。
 - ・ 体育の時間に学習した運動を取り入れた体力づくりを行う。
- 授業の内容や日常生活で気になることや興味があることについて、図書館や博物館などを活用しながら、とことん探究する。 など

- 上記のように、子供が家庭学習の目標や方法を自ら選択し、主体的に学びを進めていくためには、学び方の選択肢を広げ、学校と家庭をつなぐ学習環境の整備が重要になります。その一つとしてタブレット端末等の活用があります。
- 児童生徒が場所や時間等にとらわれない学びや、学校と家庭での連続した学びを実現するためには、タブレット端末を持ち帰るなどした上で、児童生徒自身が必要なときに必要な方法で、文房具のように日常的に利用できるようにする必要があります。

－タブレット端末を活用した家庭学習の例－

- グループで一つのプレゼンデータをそれぞれの家庭から共同編集する。
- それぞれが作成した発表データにお互いのコメントを入れる。
- 学習のまとめを動画で作成する。
- 技術・家庭科や音楽科、保健体育科など、家庭での取組を動画に撮って提出する。 など

【小学校における「家庭学習マイゴールチャレンジ」の実践例】

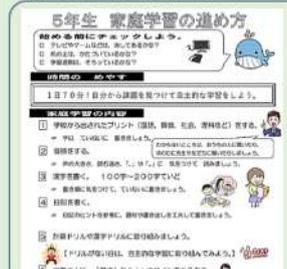
(様式1)

「家庭学習MGC」実践例

知名町
教育委員会
知名小学校 5年

○ 家庭学習の基本的な考え方

- ★家庭学習の取り組み時間の目安は、「学年×10+20分間」と設定。
例：5年生⇒5×10+20=70
70分間の取り組みができるように、家庭学習の内容を工夫。
読書も家庭学習の中に位置付けることで、読書冊数も向上させる。
- ★家庭学習が進められる環境づくりができていないかチェック。
・テレビ、ゲーム、タブレット端末等のスイッチは切っているか？
・机は整理されて集中できる場所になっているか？
・鉛筆、消しゴムなどの学習用具はそろっているか？
- ★保護者のチェック&見届けまで
家庭学習が終わったら、保護者に見せてチェックをもらう。



5年生 家庭学習の進め方

始める前にチェックしよう。

1日15分！自分から課題を見つけよう！

家庭学習の内容

1. 学習の進め方

2. 学習の場所

3. 学習の道具

4. 学習の記録

5. 学習の振り返り

○ MGCの取組

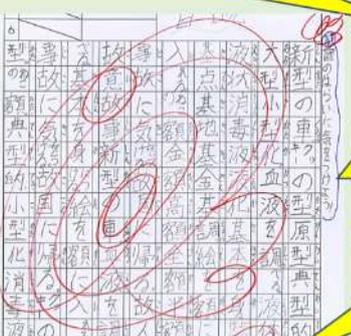
【小学5年生 国語他のMGC】

設定した目標を達成するために、めあての設定と振り返りに取り組んだ家庭学習

★ポイント

見通しをもって取り組むために、宅習のページには、今日の家庭学習で「どんなことに取り組むのか」や、「どんな目的をもって学習するのか」を書いている。

この1ページで学んだことや身に付いたことを自覚し次の学習につなげるために、宅習の振り返りを書いている。



漢字の練習に取り組む際にも、目的をもって取り組むために、何を意識して練習するのかという目標を立てている。

目標としていたことがどれだけ達成できたのかを把握するために、目標に対する振り返りを書いている。

自分の課題から目標を立て、それに基づく振り返りまで実践し、「学び方」を身に付ける流れができています。

授業と家庭学習を往還しながら、生徒が目的をもって学習を進め、振り返りを通して自らの学びを調整する姿が見える実践です。

【中学校における「家庭学習マイゴールチャレンジ」の実践例】

(様式1)

「家庭学習MGC」実践例

宇校村
教育委員会
名柄中学校 2年

○ 家庭学習の基本的な考え方

- ★ 小中学校の全校取組「我が家の家庭学習3か条」の実践化
 - ① 余裕をもって勉強時間を確保する。(子供自身の課題)
 - ② 正しい姿勢で学習しよう。(保護者が期待する子供への課題)
 - ③ 字を丁寧に書く。(担任と話し合っ定めた課題)
- ★ 中学校の重点取組～家庭学習の充実と教師の見守り
 - ① 生活の記録…毎日のあつて、その日の家庭学習の計画を立てる。
 - ② 宿題…各教科から指示された課題に取り組む。
 - ③ 宅習…自分で学習方法や内容を決めて取り組む。
- ★ 提出物を使った振り返りの活用～保護者・学校・子供の連携
 - ① 毎日の振り返り…生活の記録
「家庭学習の記録」を使って、学校で立てた計画に沿って、実際に学習した内容や時間、達成度を記録する。
教師は、提出物を通して、本人の学習状況を確認し、適宜、担任や教科担当が助言する。
 - ② 2か月ごとの振り返り…生活リズムチェック表
全校取組である「生活リズムチェック表」を使って、「我が家の家庭学習3か条」の達成度や実際の学習状況を家庭で話し合うことで、家庭学習の取組や学習環境の見直しを行う。家庭での振り返りは、担任と学習係の教員、管理職が共有し、コメントを通して、本人と家庭にフィードバックする。



オリエンテーション(生徒)とPTA(保護者)で説明

○ MGCの取組

【中学2年生 表現活動(社会科、国語科)における発表のMGC】より分かりやすく、魅力的に伝える発表にするため、情報収集や資料作成の工夫に取り組んだ家庭学習

★ポイント

- 1 社会科…教科書やノートを読み返して、授業で学んだことを「パフォーマンス課題」にまとめる。
 - 各単元の導入時に、進め方と発表までの流れを理解し、授業での学びを生かしながら、自分の考えに沿ったパフォーマンス課題を作成する。
 - 授業の中で、発表の構成を考え、資料の作成や家庭学習で行うべき改善内容を整理する。
 - 授業では不十分だった内容は、納得できるまで家庭学習で練り上げた上で発表に臨んだ。発表動画を撮って、振り返りを行った。
- 2 国語科…資料を示してプレゼンテーションにまとめ、授業参観で発表する。
 - 授業では、「山村留学」の視点から、宇校村を活性化するための、資料を整理しながら構成をまとめた。
 - 学校ではネット利用に制限があるため、家庭で学習支援アプリを活用し、資料を練り上げた。
 - 授業と家庭学習の成果を、授業参観で保護者にも披露し、みんなで振り返りを行うことで、自分の学習の過程と発表内容に、大きな達成感を得ることができた。



「家庭学習マイゴールチャレンジ」実践例

←鹿儿岛県教育委員会
「家庭学習マイゴールチャレンジ」実践例



家庭学習でのICT端末活用の実践事例 (StuDX Style ホームページ)

←文部科学省「StuDX Style」

5 「学習者主体の授業」を実現するために、どのような研修が必要ですか

Answer

子供の学びと教員の学びは相似形であることから、「学習者主体の授業」を実現するための研修も、研修者が主体となって「学習者主体」の視点を重視した授業研究を中心とした研修が求められます。

- 「学習者主体の授業」を行うに当たっては、まず、それぞれの教員がもつ「子供観」を交流し、「観のアップデート」を行うことが重要です。
- その上で、子供たちに育成する資質・能力を校内で共有し、具体化に向けた手立てを教育課程に反映し、実施、評価、改善していく組織体制が不可欠です。
- その共通理解の下、授業参観を行う際には、子供の学びの姿（事実）が、育成する資質・能力を発揮した姿として表れているか、「子供たちが」何をつぶやき、どのような行動をとっているかを根拠に指導法を見つめ直すことが大切になります。
- このような視点に立って授業研究を行うには、本県が推進している授業研究が有効です。

どのような授業研究ですか

1 子供の学びの姿（事実）からスタートする

校内研究授業では「首をかしげていた」、「すぐに鉛筆を持って書き出した」など、子供たち一人一人の学びの事実を丁寧に見取ります。その際、「楽しそうに活動していた」という推測や、「子供がよい発表をしていた」という評価は除きます。

2 子供の学びの姿（事実）の解釈について交流する

事実のもつ意味や解釈を交流することにより、新たな気付きや発見とともに、授業観や子供観等の観のゆらぎが生まれます。

3 授業における目指す子供像に迫っていたかどうかを検証する

子供の学びの姿（事実）の背景を、子供の立場になって考えます。

4 共通実践事項を検討し、実践する

子供たちのために具体的に授業をどのように改善するかを話し合い、共通実践事項として決定します。決定後は、共通実践事項を踏まえた授業実践を行います。



どのような効果がありますか

上記の1～4の授業研究を行い、授業改善に生かしている学校では、主体的に研修に参加する教員が増え、子供観の交流や授業の在り方に関する積極的な意見交換が行われています。

また、学校全体で目指す子供の姿を追い求めた具体策を検討し、学力調査の結果につながっている学校も増えています。実践している学校では、以下のような声が聞かれます。

（参加教員）

子供の学びの姿（事実）の解釈では、多様な見方が見られ、新たな視点に気付かされた。子供を観察する力をしっかりと身に付けたい。

（管理職）

学習者主体という言葉はよく聞かすが、子供を主語として語り合う教員の姿が、求められている姿だと実感できた。

（授業者）

教科は異なっても、同じような部分に課題があることが分かり、全校体制で改善を図る必要性を感じた。



総合教育センター作成による「教職員のための研修の手引き」がリニューアルされています。子供たちの資質・能力の育成に向けた組織的な校内研修の在り方の参考として活用しましょう。

← [総合教育センター「教職員のための研修の手引き」](#)

6 「学習者主体の授業」の効果を高めるために必要なことは何ですか

Answer

生徒指導、特別支援教育、教育DXといった、様々な視点から授業改善に取り組むことが大切です。



視点I 「生徒指導」の視点を重視した授業改善

- **生徒指導提要**では、学習指導の目的を達成するとともに、生徒指導の目的を達成し、生徒指導上の諸課題の未然防止を図るためにも、教育課程における生徒指導の働き掛けが欠かせないとされています。
- 学習指導と生徒指導を分けて考えるのではなく、相互に関連付けながら両者の充実を図り、教育目標を実現するために、「**子供の発達を支える指導**」（発達支持的生徒指導）の充実を具現化することが大切です。

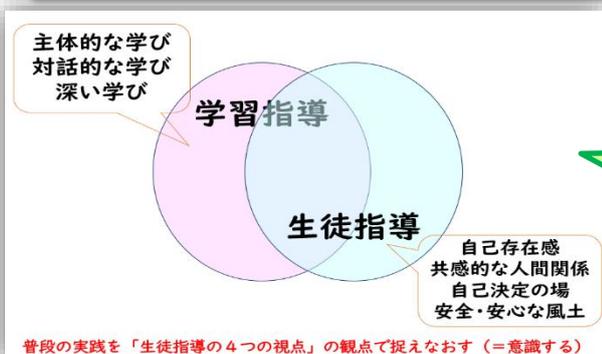
発達支持的生徒指導とは何ですか

- 特定の課題を意識することなく、**全ての子供を対象に、学校の教育目標の実現に向けて、教育課程内外の全ての教育活動において進められる生徒指導の基盤となるもの**
- 学校や教職員は、子供が自発的・主体的に自らを発達させていく過程を支えるという視点に立ち、子供の「個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支える」ように働きかける。

<大切！>

- 全ての子供への日常的な挨拶や声かけ、励まし、賞賛、対話 等 } 学習指導と関連付けて行うことも重要
- 授業や行事等を通じた個や集団への働きかけ
- 学級や学校をどの児童生徒にとっても落ち着ける場に（居場所づくり）、活躍できる場を計画・準備する活動（絆づくりの場の提供）等

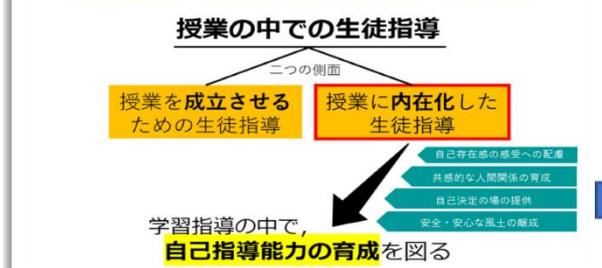
授業の中に、生徒指導の実践上の4視点を取り入れましょう。



これからの授業づくりでは、「**学習指導要領**」の趣旨を踏まえるとともに、「**生徒指導提要**」も活用して、学習内容や支援の方法、学習環境や形態等を工夫することが重要です。

授業こそ、最も重要な発達支持的生徒指導の場です。

これからは、**学習指導と生徒指導の一体化を!!**



生徒指導の実践上の4視点

- 自己存在感の感受への配慮
- 共感的な人間関係の育成
- 自己決定の場の提供
- 安全・安心な風土の醸成

このような取組を積み重ねることが「魅力ある学校づくり」を推進する上で重要です。発達支持的生徒指導を踏まえた学習指導が展開されることで、児童生徒の自己肯定感や自己有用感が高められるとされています。このような生徒指導の視点を重視しながら授業改善を行っていくことは、「学習者主体の授業」を実践するためにも重要となります。

視点Ⅱ 「特別支援教育」の視点を重視した授業改善



「個別最適な学び」と「協働的な学び」を行う際には、特別支援教育の視点に立って指導・支援を行うことが有効です。

1 特別支援教育の視点に立った「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現

はじめに・ 学びにくさのある子供のアセスメントを実施→学びにくさを把握し、個別の指導計画を作成→PDCAサイクルで実施

Plan ・ UD(ユニバーサルデザイン)を意識した単元構想と授業づくり

・ ICT等を活用した一人一人に合った指導・支援の計画

Do ・ 授業の実践 ・ 「個別最適な学び」 ・ 「協働的な学び」

Check ・ 有効な指導・支援について本人(保護者)とともに確認 ・ 課題の把握

Action ・ 個別の指導計画を更新 ・ 本人・保護者との評価の共有 ・ 授業改善

「個別最適な学び」を教員の視点で整理した概念が「個に応じた指導」です。「個に応じた指導」で子供が身に付けたことを、学級等で友達とともに学ぶ集団学習の中で生かすことができるよう、「協働的な学び」を計画的かつ積極的に工夫して取り組むことが大切です。



2 ユニバーサルデザインの視点に立った授業づくり・環境整備

- 発達障害等を含む配慮を要する子供に「ないと困る支援」
- どの子供にも「あると便利で、役に立つ支援」



全ての子供の過ごしやすさと学びやすさの向上

**ユニバーサルデザインの視点
焦点化(シンプル) 明確化(クリア) 視覚化(ビジョン)**

ア 焦点化(シンプル)

- 環境づくり(場の設定・音の配慮)
- イメージづくり(間・選択肢・区切り)
- 短い言葉で伝える
- ※ 教員がどれだけ意識して指導することができるかが大切です。

イ 明確化(クリア)

- 正しい行動を明確に伝える
- 「いつ・どこで・何を」すればよいのか(大丈夫なのか)教える
- ※ 一斉指導で、または個別に明確に伝えることが大切です。

ウ 視覚化(ビジョン)

- 見えないものを見えるようにする
- イメージを助けることで安心を与える
- ※ 視覚化することで、安心して自分から動くことやできることが増える。



学級でのユニバーサルな配慮 ~例~
「注意喚起」・・・注目させてから話す
「視覚化」・・・言葉+実物・絵・文字
「簡潔な指示」・・・一度に一つの指示
「復唱」・・・繰り返し唱える
「行動の確認」・・・今から何をする？



ユニバーサルデザインの視点に立った授業づくりを進める際には、「学びの場の変更に係る「段階的な検討のプロセス」の手引・資料集」も活用してください。

← 鹿児島県教育委員会 「学びの場の変更に係る「段階的な検討のプロセス」の手引・資料集」



視点Ⅲ 「教育 DX」の視点を重視した授業改善

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現には、子供自身が ICT を活用して個々の状況、特性に応じて、自ら目標を設定し、学習方法等を自ら選択、自己評価できる学習モデルを創造していく、教育における DX(デジタルトランスフォーメーション)を推進することが不可欠です。

1 タブレット端末利用の日常化・文房具化

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現に向けて、タブレット端末を活用しましょう。

子供が場所や時間・言語等にとらわれない学びや、個々やグループ等の特性に応じた学びを実現するためには、タブレット端末を、教員の指示に限らず、児童生徒自身が必要な時に必要な方法で、文房具のように日常的に利用できるようにする必要があります。これにより、子供は、自らの学びを調整しながら学び進めていくことが可能になります。

2 教育データの利活用

蓄積された教育データを有効に活用し、授業改善に生かしましょう。

- 子供の学習履歴や学習成果物等のデータを基に児童生徒の学びの特性を把握し、それに
応じて指導の個別化を図ったり、子供自身が学習方法を選択したりすることができるように指
導します。
- AIドリル等を活用することで、習熟状況をリアルタイムで確認できます。一人一人の子供の
学習進度や課題に応じた練習問題を自動で表示させるなど、主体的に学習に取り組めるよう
にします。
- 学習系と生活系のデータ(出席状況、心の健康状態など)等、様々なデータの相関により、
これまで教員の勘や経験だけに頼っていたものに、データによる裏付けを加えることで、より子
供を適切に理解し、指導・支援に生かすようにします。

3 学習の基盤となる情報活用能力の育成

教科等横断的な視点から、学習の基盤となる情報活用能力の育成を目指しましょう。

学習指導要領解説 小学校総則編から抜粋

教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成

各学校においては、児童の発達の段階を考慮し、言語能力、情報活用能力(情報モラルを含む)、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう、各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする。



デジタル学習基盤の活用は、授業の目的達成のための手段であり、子供の情報活用能力を育てるものです。

また、校務に活用することで教育 DX を推進し、その便利さを授業に生かしていくことが必要です。



文部科学省
「StuDx Style」(スタディーエクスタイル)



鹿児島県総合教育センター
「かごスタDX」



鹿児島県教育委員会
「教育の情報化」推進プラン Ver.2.0



鹿児島県教育委員会
「100人の1歩のための100のヒント」

※県域アカウントによるログインが必要です。